
レリテンゲメニオ

村丘いたく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レリテンゲメニオ

【Nコード】

N5131BA

【作者名】

村丘いだく

【あらすじ】

太陽系第三惑星地球にある日本と言う国そこにある新ヶ浜と呼ばれる迷路の様な町で繰り広げられる馬鹿騒ぎを綴った物語。魍魅が跳梁し、魍魎が跋扈する

怪異と悪意に彩られた奇妙な町。昼は人の、夜は魔の支配する出鱈目の町。今宵も、人外達の祭りが始まる。人の常識を超えた者達が集い、奇天

烈な闘争の宴が開かれる。さあ、奪いあうがいい、この世の全てを面白おかしく書き殴った究極の魔道書 レリテンゲメニオを。

今夜も彼はデッキブラシを振るう

漆黒の空。星々はその姿を闇に隠し、歪に欠けた青白い月だけが不気味に大地を照らしている。大地に広がるのは、でたらめに建物を並べた迷路のような町。そこを一望する高台を敷地とする「薪ヶ浜第一学園」。そう呼ばれる学び舎の屋上に彼は、天野アツキは、立っていた。

「ふあゝあ、ったく、毎晩毎晩さあ、たまったもんじゃないよ。」
あくびを一つ。短く切り揃えられた黒髪をいじりながら一人文句を言う。その手には身の丈程の長さの柄が付いたデッキブラシが握られており、それに寄り掛かる様にしながら、また一際大きなあくびをした。

「愚痴なら仕事の後にしなさい。… たつぷり聞いてあがるから。」

どこからともなく天野に語りかける声。振り返るとそこに一人の女が立っていた。夜空の様な黒に彩られたドレスを身にまとい、シヨートボブの赤髪に色白の端正な顔が映える、貼り付けられた作り笑顔がなんとも胡散臭い。黒いハードカバーの本に目を落としながら、気だるげな態度の少年 天野に言う。

「そういう契約でしょ？今更、何を言ったところで遅いのよ。あんたは労働者。私はその雇用主。OK？」

「OK？つじゃねえよ。とんだブラック企業じゃねえか。夜勤手当くらい払いやがれてんだ。」

天野はうんざりした表情を浮かべ、こちらを見ようともしない女を睨みつける。素知らぬ顔で読書が続ける女を心中で罵りながら、視線を眼下のグラウンドへ向ける。日中は学園の生徒達で賑わっているであろうその場所も、今はしんと静まり返っている。

「だいたいさあ、お前、もうすぐ来るとか言ってたよな？全然、来

ねえじゃんかよ。」

「あれからまだ10分も経ってないわ。せつかちなよ、あんたはもつと心に余裕を持ちなさいな。」

「っは、うっせえ。だらだらすんのは性に合わねえんだよ。」

互いに目も合わせずに文句を言い合う、暇を持って余した男女。黙々と読書に耽る女を尻目に屋上をぶらぶらと練り歩く天野。早く寝たい、ふかふかのベッドで、枕に顔を埋めながら。そんな思考に囚われながら、デッキブラシを引き摺る。ひとしきり練り歩いた後、屋上を仕切る金網のフェンスに手をかけ、唸り声を上げた。

「だああああ！もう今日は何も来ねえよ。来ない。うん、来ない。終了！今日の勤務は終了。解散！オレは帰る、帰って寝るからな。と言う事で、また明日な、“ダンタリオン”。」

デッキブラシをずりずりと引き摺り、天野は帰ろうとする。やれやれと言った様子で首を振り、呼んでいた本を閉じると、ダンタリオンと呼ばれた女は、天野を呼び止める。

「盛大なサボタージュ宣言をしたところ悪いけど、来たわよ。来ちゃったわよ？お客様。」

天野はぴたりと動きを止めた。舌打ち、苦々しい顔で頭を掻く。

「あーあー、憎たらしい位にグッドタイミングじゃないですか、この野郎が。」

そう言いながらグラウンドに目を向ける。そこには、敷地を囲う外壁を飛び越え、ぞろぞろと群れを為して入り込んでくる“何か”の姿があった。二十体前後のそれらは、羽毛の無い鳥と人間を掛け合わせた異様な風体を月明かりの下に晒している。

「んだよ、コカトリスじゃねえか。雑魚ばかり小出しにしゃがんで、デカラビアの野郎。」

「はいはい、ここにいない奴の文句言ったところで意味はなし。さっさと片付けなさい。」

眼下に広がる異形の光景に臆する事も無く、当たり前のように飛び降り防止用のフェンスをよじ登る天野。フェンスから身を乗り出し、

嫌味たらしい笑みを浮かべる。

「分ったよ。あいつらカタしちまえば、今日はもう帰っていいんだな？」

「ええ、そうよ。お疲れ様、アツキ君。しっかりやんなさいよ。」
「そう言い残し、ダンタリオンはその場を後にした。闇に溶ける様に、最初からここにはいなかったかの様に。」

「ひゃほーい、いいぜ、いいぜ。了解だ。サクツとやってやるよ。サクツと…お掃除開始ってかあ!？」

そう叫ぶと天野は思い切りフェンスを蹴り、空へと飛び出した。学ランがたなびく、重力に引かれる、急降下、落ちて行く、地面へ、グラウンドへ、化物　コカトリス達へ、倒すべき、屠るべき目標に向かって、握る手も力強く得物のデッキブラシを振り下ろした。

「こんばんはあ、糞つたれ野郎共っ!!！」

辺りに地面が砕ける音が響く。こうして、怪異溢れる異形の迷路“薪ヶ浜”の狂った夜は更けていく。

昼下がりのスクールライフ

うららかな五月晴れ。暑くもなく、寒くもないすこしやさしい初夏の午後。規則的に並ぶ机と椅子、席に着くのは青春真っ盛りの少女達。ここ薪ヶ浜第一学園2年B組では、世界史の授業が行われていた。黒板には、世界の偉人たちの逸話や、西暦何年にどこで何が起きたかを分りやすい語呂合わせと一緒に書き出されている。厳しい顔つきに筋骨隆々の身体をエンジョ色のジャージで包んだ男性教師が生徒達を見回しながら、お前これを答えてみる、ここがテストに出るぞ、等々、生徒に答えさせたり、要所要所に解説を入れていく。ありふれた学校の一風景だ。だが、ただ一つだけ、この教室には異質なモノがあった。世界史教師“錦山リヨウジ”は頭を悩ます、大きないびきを掻き、堂々と悪びれもせず情眼を貪っている不届き者、2・Bの問題児“天野アツキ”の存在が。

「おい、いい加減に起きたらどうだ天野！」

「うゝん、あとごゝんゝん。」

間の抜けた声。どうやら、聞く耳は持っていないらしい。よし、いいだろう。それがお前の答えだな。それならこちらにも考えがある。額に青筋を浮かべ錦山は心の中でそう呟いた。その手にはチョーク、生徒達はどよめき、教室の空気が張り詰める。チョークの鬼と呼ばれ、生徒に恐れられている。そんな男だ。今からすることは一つ。

「起おきいろおおおお！！！」

怒声と共に勢いよく投げ飛ばされるチョーク。かつて、甲子園でならした強肩は衰えることなく、まるで吸い込まれる様に凄まじい勢いでチョークが“目標”に向かっていく。

パキンと乾いた音を立て、天野の無防備な頭に当たったチョークが砕けちる。

「うゝん、うゝん。」

頭部の痛みに天野は唸り声を上げる。よしきた、眠り姫のお目覚めだ。勝ち誇った笑みを浮かべ、かなり恥ずかしい事を考える錦山今年で36歳、妻子持ちの働き盛り。

「うーん、むにゃ、…そんなに食べねーよう。」
寝言の猫なで声が癪に障る。天野は痛みより眠気が勝った様で頑なに起きようとしない。

その態度が錦山の何かをぶつりと切った。湛える笑みが何か恐ろしいような雰囲気帯びる。

「はは、ははは、は、はははは。いいぞ。いいぞ。分った。よく分った。よし、よしよしよしよし、付き合ってやろう。とことん、お前に付き合ってやるぞ。ははは…。」

笑顔の中から怒りを滲ませる錦山。同僚に影で熱血馬鹿と呼ばれている男。こうなったら起こす、なにがなんでも。そんな決意を胸に秘め。その手にはあるのは溢れんばかりのチヨーク。心の中で甲子園のサイレンがけたたましく鳴る。プレイボール。

「天野おおおおおおお！！」

錦山の怒りと魂の甲子園は授業そっちのけで行われたが、結局、情熱も虚しく天野は目覚める事はなかった。この時、教師として自らの限界を感じた錦山は辞職を決意するが、同僚に馬鹿じゃないのかと言われ止められた。

「いつやー、最高だよ、お前。全然起きないんだもん。錦山の奴、すごい顔してたぜ？」

クラスのお調子者“田山ハルキ”の称賛を聞き流しながら、身に覚えのない頭の痛みに天野は首を傾げていた。

「痛い、なんだってんだ？…うわ、真っ白じゃねえか！」

頭をさわった手が白に染まっていた。それどころか、よく見れば全身がなんだか白っぽい。天野が錦山のチヨーク地獄に晒され続けた結果、砕けたチヨークの粉が舞い散り、天野自身どころか机も、椅子も、その周囲もまるで雪景色の様になっていた。

「あーもう、何だこれ。最悪だ。もう休む。次の授業、サボってやる。」

授業そっちのけで居眠りをし続けた自身の非など知った事かと言ふ天野の態度に田山は困った様に首を傾げる。

「おいおい、冗談だろ？今日一日、今までの授業全部寝てたくせに、まだ眠たいのかよ。」

自慢の黒髪を白に染めるチヨークの粉を払いながら、あくびをする。そんな天野の様子に呆れた様に驚く田山。

「ウソ、マジで？…お前、ちゃんと夜寝てんのかよ。」

夜、結局のところ“掃除”は日が昇るまでかかってしまった。自宅で1時間も寝むれていない事を思い出す。どうりで眠いわけだ、改めてそう思う天野である。

「んー、寝むれてない、だな。やっぱり。」

うん、と一人納得する天野を見て、田山はより一層、呆れた顔になる。

「はあ、昼夜逆転の生活ってか？」

「ん、そうだな。」

「そうだなっじゃないよ。お前、寝る間も惜しんで夜に何してるんだよ？」

「それは、バ」

化物退治。滑りそうになった口を止める。ああ、言えない。信じてもらえるはずもないし、何より言っではいけないのだ。“彼女”との契約、破ってはならない約束だ。少しだけ言い訳を考えたが、良い物が浮かばなかったので、適当にごまかすことにした。

「バ？何だよ？」

「…何でもない、色々だよ。い・ろ・い・ろ。」

「ふーん、あっそう。」

訝しげに頷く田山。バって何だ？バカ？いや、何かエロい事か？そんな独り言を呟き、何やら妙な妄想を始める。これ以上相手をするのも面倒になってきたので、天野はさっさと休める場所 保健

室へ向かうことにした。

「あー、それじゃあ、オレは保健室に行くから。」

後はよろしく、そう言っただけで席を立つとした矢先。

「何！？保健室だと！」

思考の海から唐突に舞い戻り、田山は天野に詰め寄った。面食らった天野は思わずたじろいでしまう。

「お、おう。」

「よし！一人じゃ辛いだろう、付き添ってやるよ。」

なにがよし！なのだろうか、人の不幸で喜びやがって、天野は不愉快な気分にかめつ面になった。だが、このやたらに軽い友人のことだ、理由は簡単に推測できる。

「いやー、今日はまだ会いに行けてなかったからな！。リオちゃん。」

鼻歌交じりに田山は嬉しそうにそう呟いた。

段田リオ

この薪ヶ浜第一学園に昨年から赴任してきた養護教諭である。どこの海の向こうの国の人間の血を引くらしく、日本人離れた美しい容姿を持った、鮮やかな赤髪が印象的な女性だ。非常にくだけた性格の人物で誰に対しても分け隔てなく接する為、生徒達はもちろん、教師陣からも人気が高い。田山ハルキ、彼もそんな彼女の“ファン”の一人だ。

保健室へ向かう道中、スキップでも始めそうな足取りで前を進む彼を見ながら、本当にうまく入り込めたものだと思つた。天野は思った。

「しっかし、物好きだよな、どいつもこいつも。あんなのどこがいいんだか。」

天野の呟いたその言葉にぴたりと動きを止めた田山。何事かと思つた天野に次の瞬間、勢いよく掴み掛かった。

「オイ、オイオイオイ。おい、何言っちゃてんのさ、きみい！あんな絶世の美女、学園のアイドルを相手になんつーことのため

まっつてくれちゃってんの。あーあ、回しちゃった。この薪ヶ浜第一学園全部を敵に回しちゃったよ？まーわーしーちゃったああ！」

「お、おう？」

凄まじい剣幕で詰め寄って来る田山に思わず後退る天野。とりあえず、アイドルは言い過ぎだと思った。些か苦しい、年齢的に。

「いや、だつてあいつ無いじゃんさ、ペタンコじゃん、…胸が。」

遠慮がちに天野はそう言った。田山の目つきは更に険しくなった。

「こんのお、オツパイ星人めっ！！なんっつー狭い視野だ。お前、胸がデカけりや何だつていいのかよ？ブスでもいいのか、ああ？」

「いや、それは嫌だけどさ。」

でも無さ過ぎるのもちよつと、その一言は空気を読んで飲み込むことにした。天野の返答にうんうんと頷く田山。

「そうだろ。この世には完璧な物なんて無いんだ。求め過ぎちゃいけない。それにさ、小さいのがいいんじゃないか。ステータスつて言うじゃん、希少価値つて言うじゃん。それを気にしてる、コンプレックスを持つてる、最高じゃん。萌えるじゃねえか。」

「あら、何がそんなに萌えるのかしら？」

熱弁をする田山の後ろから話しの発端となった人物“段田リオン”その人が話し掛けてきた。

「いいい！？リ、リオちゃん！！何でもない。なんでもないよおお！？」

「あら、そう？うふふ、田山くんは今日も元気ね。」

あたふたと慌てふためく田山をクスクスと笑う段田、ふと田山の後ろに隠れていた天野を見つけ今度は思いつ切り噴き出す。

「ぶふうー！ど、どうしちゃたのよ、天野くん。全身真っ白！まるでテレビで罰ゲーム喰らっちゃった芸人みたいじゃない。ぶ、ふふ、あははは！」

全身白粉まみれの天野に指を指しながら腹を抱えながら笑う段田。どうやらつばに入ってしまったらしい。ひいひいと身を震わせながら息を整えている。むつとする天野の横で調子を取り戻した田山が

頭を掻きながら説明をした。

「いや、こいつさ、さっきの錦山の授業で堂々と居眠りしやがってさ。それで怒った錦山がチヨークをこいつにやたらめったに投げつけたんだよ。」

「あらあら。まったくしょうがないわね、天野くんは。」

嫌味つたらしい笑みを浮かべ段田は天野を見つめる。へいへいと答え、天野はそっぽを向いた。

「それでさ、なんか調子が悪いらしくてさ、こいつ。だから、今から保健室に行こうと思ってたんだよ。リオちゃんにも会いたかったしさ。」

これでもかと言うほどに満面の笑みで親指を立てる田山。口から覗く歯がキラんと光った気がした。

「あら、そうだったの。ありがとうね、田山くん。後は私が付き添うから、あなたは教室に戻っていいわよ。」

笑顔から一転、驚愕の表情になる田山、納得いかないと言わんばかりに叫ぶ様に段田にもの申す。

「えー、何でだよ!? オレもリオちゃんともっとお喋りしたいのにつ! 酷な事言わないでくれよお!!」

「うーん、それは残念だけど、もう授業が始まる時間よ。ほら。」
そう言いながら、段田は左手首に付けた腕時計を指しながら見せつけた。

「田山くんはそんなに元気なんだから、授業受けてくれたら嬉しいな、私。」

申し訳なさそうに首を傾げ、微笑む段田。その儂げな笑顔に田山は一瞬ときめいた様子だったが、心底残念そうに項垂れながら了解した。

「うっ、分ったよ。他ならないリオちゃんの頼みなら仕方ない。」
「ありがとう。授業が終わったら、遊びに来てくれても大丈夫よ。放課後だし、お菓子も用意して待ってるからね。」

段田のその一言に、田山は目を輝かせながら元気を取り戻した。

「おつ、マジで！？ひゃっほう、絶対行くよ！そんなじゃな、リオちゃん。アツキ、リオちゃんに変な事するんじゃないぞ！」

「……しねーよ。」

呆れた天野の声を無視して、田山は意気揚々と鼻歌を歌いながら中途半端な長さの茶髪を揺らし駆けだしていく。廊下は走っちゃダメよと注意をしながら段田は笑顔で手を振る。

「ふー、可愛いじゃない。やっぱ、いいわね男子高校生、初々しくて。食べちゃいたいわ。いい友達を持ったじゃない。ん、オツパイ星人さん？それと私はちよつと体型が“スマート”なだけよ。」

スマートの部分をやたらに強調してくる。若干、段田の笑顔は引き攣っていた。天野は空恐ろしいモノを見る目で段田を見た。

「ああ？いつから聞いてやがった、てめえ。」

さあねと言つて、段田は楽しそうに口元に手をやりながらゆつくりと歩き出した。聞いても無駄だと理解し、ため息を吐きながら天野はその後に続いた。

「それにしても、少しは真面目に授業を受けてみたら？さつき、錦山先生が泣きながら教師なんか辞めてやるって叫んでて職員室大変だったんだから。石橋先生、なだめるのに苦労してたな！」

先程まで居た職員室の惨状を思い出しながら、段田は天野にそう言う。それに天野はたつぷりの皮肉を込めて目の前の女に返した。

「あーん？そりゃ無理ってもんだ。毎晩毎晩、“誰かさん”がこき使いやつがてくれて、寝る時間もないんだからな。」

「もう、そう噛みついてこないでよ。私の所為じゃないでしょ。文句なら、毎晩飽きもせずに来て来るあいつらに言つてちょうだい。」

「原因は誰だよ、原因は！？こつちはいい迷惑だよ。いい加減、大人しく帰つてやれよ。いいじゃねえか、あんなに好かれてんだからさ。オレはお似合いだと思つぞ、お前等。」

「嫌よ。絶対に嫌よ。あんな気色の悪い女の腐った様な奴。お似合いとか言わないでよ、気持ち悪い。ああ、気持ち悪い。ほら、鳥肌

立ってきちゃた！」

痴話喧嘩の様なやり取りを続けながら、保健室へと進んでいく。そして、保健室に到着すると天野は一目散にベッドに飛び込んだ。純白のシーツに身をゆだね、幸せそうな顔で枕に頬づりをしながら、大きなあくびをした。至福の時間だ。そんな天野の流れる様な行動に段田は呆れはてて頭に手をやった。

「まったく、…いいこと？あなたには、私との契約があるの。契約は絶対の不文律。契約が終わるその時まであなたは私の奴隷なんだからね。」

「へいへい、分つてやすよ。ご主人様。」
ひらひらと天野は適当に手を振った。その態度に段田は少しばかりむっとする。

「はあ、もう！調子だけはいいんだから。」
デスク用の回る肘置き付きの椅子に座り、ベッドで睡魔に屈そうとしている天野をねめつける段田。怪しく光るその視線には嗜虐の色が見える。

「しっかり睡眠をとることね。今晚も団体さんで…、ああ、そうそう、今日はいつもの使い魔さん達の“ご主人様”もいらっしやるみたいだから。」
「ぐうー。」

思わず怒鳴りたくなる様な段田　思考の悪魔“ダンタリオン”
のその言葉に、天野は気が遠くなるのを感じた。もう、どうにでもなってしまう。そう思い、天野は思考を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5131ba/>

レリテンゲメニオ

2012年1月14日04時54分発行